

《眼科臨床エキスパート》 黄斑疾患診療 A to Z

吉村長久, 後藤 浩, 谷原秀信, 天野史郎 シリーズ編集 岸 章治, 吉村長久 編

『黄斑疾患診療 A to Z』は、網膜のメッカである群馬大と京大のスタッフによる意欲的な作品です。まず、編集者のお一人である岸 章治教授の総説で始まりますが、最初から吸い込まれるように一気に読んでしまいました(とはいえ足掛け3日かかる長編です)。私が網膜疾患を専門に志した20年くらい前は、黄斑円孔の成因や黄斑前膜の実体、糖尿病網膜症における牽引のパターンなど数多くの謎がありました。それらの疑問を一網打尽に氷解させたのが、岸ポケット(後部硝子体皮質前ポケット)でした。しかし当時の日常診療における検査法ではなかなか可視化することができず、網膜硝子体の専門家でないとその存在を実感できない状況でした。現在はOCTの進歩によって(SS-OCTの開発により)、岸ポケットをバッチリ可視化して形状解析できるまでになったわけで、隔世の感があります。

このようにOCTや眼底自発蛍光に代表される診断機器の進歩によって、新しい知見が猛烈な勢いで生まれ、新しい病態概念の確立さえ可能となりました。もうお一人の編集者である吉村長久教授が解説するMacTel type 2もその好例で、Müller組織欠損(空洞あれど浮腫なし)と考えられる層状囊胞様変性をOCTで確認することが診断の決め手です。また、黄斑偽円孔・分層黄斑円孔や中心性漿液性脈絡網膜症など古典的によく知られている黄斑疾患に対しても、新進気鋭の板谷正紀教授、辻川明孝教授らにより、新しく捉え

られた疾患機序が余すところなく解説され、「古くて新しい」疾患として見直されています。

本書にはこのほかにも、RPEの上に存在する特殊なドルーゼンであるreticular pseudodrusen, Bruch膜～脈絡膜レベルに局所的な陥没所見を示すfocal choroidal excavation, 強度近視眼における黄斑部直下の強膜が突出したdome(band)-shaped maculaなど、診断技術の進歩にともなって注目されるようになった所見が目白押しで、これらを知らずにはもはや生きた化石となってしまうこと間違いありません。さらに、典型加齢黄斑変性やポリープ状脈絡膜血管症をはじめとするさまざまな脈絡膜新生血管疾患についても、抗VEGF療法の登場によってもたらされた診療の革新的な変化と今後の課題なども的確に提示されています。そして、数々の炎症性網膜疾患、網膜変性疾患についても、どの教科書にもまだ書かれていない新しい知見が逐一補充されており、「古くて新しい」疾患として楽しめます。最後に特筆すべきは、一冊を通して眼が奪われるようなきれいな写真が満載で、解説だらけの眠くなる教科書とは違い、ワクワクしながら読める渾身の大作でした。

北大大学院教授・眼科学 石田 晋

B5・頁444 2014年

定価：本体17,000円＋税

[ISBN978-4-260-01940-8] 医学書院